

あの日から連絡がとだえて久しくなる、とあなたは予感のように考えていた。

勤めているK市の中心から帰宅して衣類をハンガーにかけ、部屋着に着替えると矢継ぎ早に湯を沸かす。錫製のちろりと、とつくりを鉛のような色をした水のなかに沈めて爛酒をつくる。ときどき冷蔵庫から漬物やつくだ煮をだしてつまむため、そのたびに台所に白いひかりがひろがる。食器棚のあたりに気配を感じた。そこにいたのか、とあなたはパスピエをみつめる。パスピエはストリングチーズを噛みさいて繊維のような細さにしてから食べている。パスピエに、きょう電話は鳴らなかつたか、と尋ねようかと考えたがパスピエはそっぽをむいてしまった。しばらくしてあなたはわたしに携帯の番号しか教えていなかったことに気が付く。てきとうにつまんでいるうちに腹はふくれてもうつまみなどはいらないから酒を飲んで寝てしまおうと思った。冷蔵庫のそばでパスピエはちいさくふるえている。あたためられた酒はワングリ型の器にそがれる。あまやかな匂いが湯気につまみながらがる。雪国でつくられたきめ細かい優しい口当たりの酒があなたの好み。つまみがなくても酒は旨かつたし、それだけで連絡がないことをあたまの片隅におしやれるような気がした。あなたはオーディオの電源を入れる。温まった酒を飲みながら午前二時までドビュッシーを聴くのがいつのまにかできた日課だった。あわただしい職場から解放されても興奮はさめることはなくあたまは熱に浮かされていた。それでも時間の経過とともに爛酒は癒し感わすように眠りへといざなつた。

ざざ降りの雨が降った日で、O駅の改札を出たところで三人は待ち合わせをしていた。人気のないずいぶんと暗い駅だった。あなたは一番に到着して文庫本を読んでいた。そこへわたしとカミヌマがあらわれてカミヌマはあなたとわたしを簡単に紹介した。まだ夜にしては早い時間帯だったのに通勤客はほとんどおらず閑散とした場所であつた。お互いに自己紹介をした。相手の名前さえ忘れてしまふようなそつけないものだった。どつか店にいこうよ、とカミヌマがうながしてわたしたちはそのあとを話すことなく黙々と歩きつづけた。どうしてO駅のようなさびれた駅を選んだのか。一向にてきとうな店はみつけれず坂をのぼりはじめて、もしかして何かの畏にはめられているのかもしれない、とあなたも予感し始めるころ、偶然ビアレストランのようなものが住宅地のなかに不釣り合いに建っていた。傘をさしながら歩いてきたからさきほど紹介されたわたしの顔をあなたはすつかり忘れてしまつていただろう。なぜわたしとあなたがひき会われたのかカミヌマの真意はいまになつてもつかめないままだ。お互い独りものだったからひつつけようとしたのだろうか。カミヌマは笑うときに金歯をみせて笑うにぎやかな男でそういう気をまわす奴にもわたしには思えなかつた。とりあえずハイネケン、とカミヌマがさきにいつてあなたとわたしもそれを注文することにした。

マレーシアから帰国したばかりという女は、クアラルンプールで買った菓子をあなたとカミヌマに渡した。ただ甘いけど、気に入ったの、とわたしはあなたが甘いものをいっさい食べないことを知らないで渡した。それからあなたをほったらかしにしてカミヌマにクアラルンプール滞在中の話をしていた。長期滞在したホテルに巨大クモが出たことをわたしは愉快そうに語った。カミヌマはときどき大声で笑いあいつちを入れて話を聞いていた。レストランのなかは家族連れや恋人たちが多くにぎわいをみせていた。ハイネケンが運ばれてきたあと、あなたは乾杯もせずに一気に飲み干してしまふ。「おい」とカミヌマがあなたをたしなめてあなたは気まずそうに笑い、喉が渴いていたからといって下を向いてしまつた。わたしはべつに腹をたてたりはしなかった。シデハラが万馬券あてたの知ってるか、とカミヌマは話題を切りかえる。わたしもそれについてここにいらないシデハラのことを着にしてまたカミヌマと雑談に興じる。

ビアレストランはあわただしく客のでいりがあり、騒々しく注文がとびかっていた。あなたはズブロッカを飲んでいて。サクラの葉の匂いがあなたの鼻をくすぐった。黒パンとスモークサーモンを食べていて、視線を漂わせながらそこにいることを愉しんでいたようだ。だれもあなたを邪魔することはしない。霧をへだてるような遠い空気がそこには感じられた。あなたから何かを話すこともない。無口だけど陰気な匂いのしない男、酒をよく飲む奴、という印象をわたしは持った。

わたしは新調した上着を椅子にかけた。傘をさしていたにもかかわらず上着の背中にも雨がびっしょりとかかっていた。その頃のわたしは体調をくずすまえの時期で外国語の勉強が趣味のいたって平凡な勤め人であった。貿易関係の会社で書類の英訳が主な仕事だったのだけれど仕事は趣味の延長線上のようなものですこしも苦ではなかった。ただ年齢を経るたびに何か重いものが自分の中のしかるような気がしていた。休みの日には一日中英辞典を眺めて単語の意味調べをしていると、なにげなくカミヌマに話したときに今晚の誘いを受けたのだった。「変ったやつがいるから来てみないか」カミヌマがいったことは嘘ではなかったが無口な気のいい男がそこにはいるだけだった。

あなたは自分の仕事の紹介を率直に「エンジニア」といった。わたしから仕事についていろいろ尋ねられたがあいづちのようなものをうつばかりで具体的なことを話さなかった。あなたは昔から自分のことを話すのは苦手だった。

「おいしい？」わたしは初対面でもケイゴやテイネイゴを使わなかった。
「うまいよ」あなたもその礼儀にのっかった。

二人の会話はそれきりでまたわたしと友人が会話をつづけた。あなたはずっと二人の話を聞きつづけながら「知らない人間と飲む酒も悪くない」と思った。「あんた呑むねえ」とわたしが言ううと「好きだからね」とあなたは応えた。

〇 駅でわかれたあと、あなたはE線の電車にゆられながらまた文庫本をひらきはじめる。葉をはさむのをわすれてしまったから、漠然とした記憶をたどりながらこのあたりだろう

というところから読んでいくが時折、この場面は前にも読んだことがあるなどというのが出てきてその度にページをばらばらめくってみたりもするのだけど結局あきらめて同じ場所から読んでいく。電車のなかには妙に人がたくさんいて、最初あなたは自分の名前が呼ばれていることにも気が付かなかった。クルハシさん、クルハシさん、とあなたの肩がたたくかれたときにやっと相手を確認することができた。《依頼主》の一人だった。

「プライベートな時間に申し訳ありません。打ち合せをされていると承知の上ですが条件はのんでいただけるでしょうか」粘りつくような生温かい声が耳元にささやかれる。喉元に込みあげてくる憎悪をあなたは堪えるので必死だった。《依頼主》は薄笑いをして帽子をとり会釈をした。角刈りのあたまがこの男のトレードマークだった。ここでお応えすることはできません、あなたはきつぱりといった。いい大人の男が顔を寄せ合って混んだ電車のなかでひそひそ話をしているから、周囲の乗客たちも奇異な眼をしていた。熱っぽい二人の視線がからがるたびに憎しきとはまた別の感情が何かその場所に宿るようにも感じられた。ゆらゆらと車内の光景が霞みはじめて、激しい頭痛があなたのあたまを射抜くように走った。

Q・ノリスケというのがこの《依頼主》の名前で友人たちと立ちあげたあなたが勤める会社の大事な顧客の一人だった。しかしQ・ノリスケはあなたの勤める会社の買収を目論んでおり、傘下に入ることを拒む場合は、ある製品を本来の半分の期日で届けよ、との条件を出したのだった。それが通らない場合は、今後一切の取引をなしにする、と告げられていた。Q・ノリスケの企業は業界内でも大手であり、その会社の方針は他の会社の動向も決めてしまうような存在感を持っていた。Q・ノリスケは寿司でも食べに行かないか、とあなたを誘ったがあなたはとうぜん断った。あなたは金輪際、私的な時間に交流を持つことを控えてほしいといって、見知らぬ駅で電車を降りてしまう。そこから逃げるようにビジネスホテルに入って翌朝はそこから出勤をした。

平日の休みの日が重なっていたからちよくちよくわたしと会うこともあった。U駅の傍にシネコンがあったから平日のひるまから海外の映画を観に行った。

観る映画はたいていわたしが決めるのに、映画がはじまってから先に眠るのもわたしだった。あなたもたいがい疲れていたからあとを追うように眠った。インドのミュージカル映画も、難解なフランスの映画も、冷戦時代のロシアを舞台にした映画においてもわたしたちの眠りをさまたげることはできなかった。眼をさましたとき、銃撃戦が聞こえたりすることもあって、まだ夢の中にいるのかと錯覚した。そうやってわたしたちはべつべつの夢を見ながらもひとつの時間を彷徨った。幾重もはりめぐらされた物語の小路を歩きながらこれが映画なのか夢なのか現実なのかもわからない蜃気楼をくぐりぬけた。二人はいびきもかかずにきょうに眠りつづけた。ほとんど死んだようにしずかに。

片方が眼をさますころには映画は終わり近くになっていた。右頬にあなたは涎のあとを残しながらこどものように無邪気に眠っていた。起こすことを躊躇うぐらいに気持ちよさそうだったからあなたは家で眠るときもそうなのか、あるいは映画館だからこんなにも安

息して眠りにつけるのか、わたしはためつすがめつ顔を覗きこみながら考える。気配を悟られたのか、あなたもそこで眼をさました。だれもわたしたちなどをみてはいないはずだがそれでも二人とも眠ってしまうことが恥ずかしくて走るように劇場をあとにした。居酒屋で映画の感想を互いに語りあった。しかし憶えている場面がずれていたりすると話が噛み合わないこともあった。あるいは眠りのはざまでお互いが知り得た情報をつなぎあわせるなんて愚かなこともしていた。記憶もあわく滲んでいるものが多くて、やはりそれが夢によってねつ造された物語ではないかとお互いに疑いあうことも稀ではなかった。それでもいつまでもこんな時間がつづいてほしいとわたしは思っていた。歩いてきた路はべつべつで眺めた風景が重ならなくても、話しあうことでその迷路をわかちあい、つなぎあわせることができたから。砂の夢をよく見るわ、とわたしがいった。砂漠、砂浜、砂時計、砂塵……。だからわたしが砂の話題をいうときは映画じゃなくて夢の話をしているのかもしれないわ。あなたはなにもいわずに頷いた。そんな風にしてたらめな映画観賞はつづけられた。

「とうとう冬がやってくるのね」。

「おれはかんねんしたよ。冬につかまってしまうことに」

「冬は嫌いだったの？」

「寒いのは苦手だが、冬は酒がうまいよ。夏もうまいけどね」

わたしたちは左右の確認もせずに夜の幹線道路を渡った。途端にクルマの激しいクラクションが雨のように二人を襲う。歩道からわたしたちをみる人がたくさんいた。「迷惑ものが」「酔っ払いじゃない？」などと罵られていたのだろう。人ぞめきにまぎれてあなたはパスピエが視線に入った気がした。あなたはパスピエに意識をうばわれつつもわたしの話を聞いている。ヘッドランプのひかりが全身に降り注ぐ。

「自分の好意とは裏腹にからだは冬を拒絶するかもしれない。過去の重い出来事のように冬はわたしにいくつかの銃弾を撃ち込む準備をしているのかもしれない」あなたはふだんと違うわたしの言葉遣いにとまどって、通りの雑音からわたしの声を拾おうとしている。

わたしは拡声器をつかって夜の街に訴えたかった。同じ言葉をさらにちいさな声でそれと自分のためにささやいたとき、なにかがわたしの口について運命みたいなものを告げたようにも思われた。その声はやはりクラクションとエンジンの音に瞬間的にかき消される。わたしたちは往來を縫うようにして次の十字路をおおきく斜めに横断する。

クアラルンプールの菓子をあなたはパスピエに食べさせてみる。パスピエは包装紙をはがそうとするが上手にできない。二、三試したあとにパスピエは包装紙をあなたに開けてもらう。パイ生地の中にドライフルーツが入っている菓子で、ぶどう・いちご・パイナップル味がならんでいた。パスピエはぼろぼろパイ生地のこなをこぼしながら食べている。ひとりで五個も食べたあとにまだ手をのぼそうとするから、とうとうあなたはパスピエからそれをとりあげてしまう。パスピエは空腹を満たし、居間で横になったまま眠ってしま

った。ぼんやりとあなたはわたしのことを考えて胸を痛くした。嫌な予感がした。眠くなるまでこがねいろのウイスキーを傾けながら氷がとけていくのをみつめていた。

ある日、会社から帰宅していつもの燗酒をつくった。めずらしく空腹を感じて缶詰のごぼういわしをつまみにしてゆっくり食べていた。そこへわたしから「体調を崩して入院しました。もう会えません」とメールが来た。めまいがするようなできごとだった。どう反応していいか分からず狼狽して考えることを止めたくなった。あなたは返事を返さなかった。洗濯をして明日着るシャツにアイロンをかけた。そして眼を閉じると眠気はすぐに訪れた。メールの最後に長いカタカナの病名が記されていたが一度読んだだけでは憶えきれなかった。この日以来、わたしからの連絡はとだえたままだ。

《依頼主》はあなたの会社を圧迫しはじめた。製品に関する仕入れ先や取引先のとる態度が少しずつ変っていった。Q・ノリスケの持つ人脈をつかえばあなたが勤める会社などひとたまりもなかった。あなたの会社の経営者はそれでも傘下にはいることを拒んだ。そうして会社からも仲間は去っていった。現場で働くあなたは早過ぎる納期に対して遮二無二働くしかなかった。会社での寝泊まりも多かったがあなたは二日に一度は家に帰り酒をつくり、ドビュッシーを聴いた。パスピエは家でさびしそうに積木をしていた。つくっては壊し、つくっては壊しをパスピエは飽きずにつづけていた。透きとおった酒をみつめながら自分が携わっていることもそれに近いことなのだろうとあなたは考えた。わずかに許された時間でわたしからのメールを読みかえすこともあった。食事をしながら、《視察者》たちと話をしながら、夜中ふいに目をさましたとき、わたしの顔がすつと浮かんだ。落ち葉を樂しそうに踏み鳴らして歩くわたしをみたのはどこだったか、あなたは思いだそうとする。近所の公園にある樅の林か。それとも一緒に観た映画で聴いたのかもかもしれない。だかららとつづく坂を宛てもなくくだりつづけるような日々があったことがなつかしかった。そのなつかしさにひきよせられてあなたはわたしのことを予感していた。虚しさが音をたてずに背後に来ているのだろうか、と振り向いたときにうしろにいたのはパスピエだった。ヨ―グルトを持って立っていた。照明の消えた部屋にドビュッシーの「ベルガマスク組曲 第四曲パスピエ」が漂うように流れていた。

製品を納入した日の夕方、職場にはほとんど人がいなかった。同僚たちは明日から一週間の休みをもらい海外などで羽を伸ばすそうさだ。あなたは隣駅のM町の蕎麦屋に入り天井を食べていた。パスピエも連れてきた。パスピエはニンジン蕎麦を食べたいと言った。てりのあるニシンののった蕎麦がすぐに運ばれる。パスピエはふうふう息をはいて蕎麦をすすった。ニシンは最後の楽しみにするといった。ここはわたしとも来たことがある店だった。わたしは蕎麦屋でうどんを食べていた。いまの自分も蕎麦屋で天井を食べているわけだ、あなたは一人笑った。連絡をしていなかったわたしに会うのは気まずかったが、他にやりたいことがないあなたはわたしに会いにいかうとそのとき決めてしまった。

ネームプレートにアサシマサツキの文字を確認するとおそろおそろ扉を開けてみた。病

室では点滴を打ちながら眠っているわたしがいた。水色の寝巻を着て、髪を枕のうえにひろげて鼻でちいさく息をしていた。だれがおいたのか青林檎がテーブルにおいてあった。

果物包丁もあったから、あなたは剥いてあげることにした。それから林檎が乾いてしまいうころになってわたしは眼をさました。途端、わたしはあなたに驚いたそぶりをみせてしまった。布団で顔の半分を隠しながら「何しに来たの」と尋ねた。

「暇だったから」

「そう」わたしは溜息のようなあいづちをうった。

「林檎を剥いてくれたの？」

「暇だったからな」

わたしは鼻で笑い、「欲しい」といった。あなたは傍にあった小皿に切れ端をのせてフオークと一緒にわたしの前に持ってきてくれた。

「さっきまでアフリカを旅していた……」

「アフリカのどこ？」

「ジブチとエチオピア。世界で最も暑い場所だよ」

わたしは髪をひたいに貼りつけるほど汗をかいていた。

あなたはハンドタオルでわたしの汗をぬぐった。

こどものようにわたしは素直に眼をとじていた。

「夢のなかで？」

再びあなたが尋ねる。わたしは濡れた息をはいてから

「そう。わたしは深い峡谷と砂漠の海を歩いていた。シヨールであたまを被っていたわ。陽のひかりを遮断しないとすぐに熱射病で仆れてしまうから。アラブ地方で買ったくびかざりをしながら目的もなく彷徨いつづけているの。アフリカでもっとも低い地域を旅していたの。旅の途中で不思議な光景ばかりが眼に入ったわ。塩の奇岩群、幾つもの火山、鉍物が湧き出る温泉、そして砂漠。摂氏四十五度の世界でわたしは黒こげになるかもしれないと不安になりながらもがまんづよく歩きつづけた。靴を穿いているはずなのに裸足のようになり足裏が熱かった。ふいに複数の声と足音が砂影から聞こえてきて、丘を越えようとティグレ族のキャラバンが日陰で休憩をしていたの。わたしは水をもらえるかもしれないと思つて興奮したわ。近づいてみるとラクダやロバは例外なくおおきな荷物を背負わされていた。わたしは水をわけてもらい喉を鳴らして飲んだ。

《あなたは旅人か？》とキャラバンの男性が声をかけてきた。

《僕らが歩いてきた方角へ向かえば塩の湖があるよ。僕らはそこで採掘された塩を運んでいる》別の男性がやさしそうな声でさういう。わたしはもしかしてだまされているのかもしれないとすこし疑ってしまった。けれどその言葉を地図にしてわたしは塩の湖へ向かう。わたしがというよりわたしの足がその塩の湖を目指しているようだった。わたしは全身が痒くなって垢をむしりながら塩の湖にむかって歩をすすめた。砂山の前方に青いあざやかなシヨールを巻いた女性が歩いていたら。わたしがいくら早歩きになっても彼女に追いつ

くことはできなかった。わたしは紅いシヨールを巻いていた。彼女の青はとてもあざやかで女らしくわたしは自分の紅いシヨールをみじめに思ったわ。わたしは彼女と自分を比較しながらその美しいスタイルの女性を凝視しつづけていた。そのうちに空の色が変り、土の色が変った。アツサル湖についた。湖に気をとられているうちに青いシヨールの女性はどこかに消えていたの。わたしは気をとりなおしてもう一度あたりの風景を眺めてみる。わずかに残された水辺のほかは地平線まで白一色。空の青色との対比がまぶしい。わたしはとびあがるほど嬉しくなった。湖のそばで塩漬けにされた山羊の頭蓋骨が売っていたの。神秘的な雰囲気気圧に気圧されながらも塩の採掘所まで足を運んだ。直方体に切り取られた板のような塩がラクダの背に積まれていった。みているだけでしょっぱくなりそうな光景だった。アフアール族の男性がわたしに話しかけてきた。テイグレ族の言葉は理解できたのにアフアールの言葉は理解できなかった。ただ《死》という言葉と《生きる》という言葉だけ理解できた気がした。それで夢は終わり。オチなんかはないの」という。

「あなたも何か話して。何でもいいから」

「何でもいいっていわれても。話すことなんか何も」

「お酒の話でいいよ。お酒好きなんでしょ」

「酒……」

「そう酒」

「あんたが憶えているか見当もつかないが、あのレストランで飲んだ酒はズブロッカだった。ズブロッカについておれが知っていることを話そう。よく知られている通りこの酒はサクラの葉のような匂いがする」

「憶えているよ、ズブロッカ飲んでいたこと。全然話してくれなかったね、あの夜は」

「もともと話すことは得意ではないからな……」

「いいわ、つづけて」

あなたはこめかみに人差し指をおさえて正確な言葉をひねりだそうとしていた。

「ズブロッカはウォッカの一種でポーランドのピアウオヴィエジャの森にしか自生しないバイソングラスという植物を潰けこんだものなんだ。ピアウオヴィエジャの森は世界遺産に認定されていてヨーロッパで唯一残る太古の森として神聖視されている」

「太古ってどれぐらい前？」

「分からないけど何千年とか何万年単位だろうね。伝説のバイソンが住む森だよ」

伝説のバイソン……、とわたしは鸚鵡返ししてから再びからだを横にした。

「いい話を聞いたわ。来週あたりはそこに行ってみるかもしれない」

「バイソングラスをおみやげに摘んできてくれよ」二人は笑いながら乾いた林檎を食べた。

ふいにからだを委ねるように思いつきのまま行動をする癖がある。

わたしは病院のひき戸をおもいきりあけて病室をあとした。寝巻の上に厚手のコートを着てあなたにもついてきてもらった。あなたはわたしにどこへ行くのか尋ねなかった。

病院独特の匂いが入院した当初はよく鼻さきにのぼってきたのにいまはそれをみつけることもできなかった。顔見知りの看護士と眼が合わないように廊下の端を足早に歩きつづけた。だれに咎められることもなくわたしたちは正面玄関から病院のそとにでた。陽のひかりをあびたときに、肌がよろこぶような心地がした。薄い冬の陽は病院の中庭にあるちいさな温室の《ばら園》にもとどいていた。ここは患者たちのために陽がでている時間だけ開放されている。緑門をくぐり、温室のなかに入る。あなたはその暖かさに驚いている。

薄ももいろのばらが疎らに咲いていた。棘は新芽のように柔らかそうだった。わたしにとつて土を踏む感触は久しぶりのものだろうとあなたは考えていた。木製のベンチがあったから二人は腰をかけた。わたしはずっとばらをみているがどこか焦点がさだまらないことも気づかれていた。ため息をついてしまう。

「どういうふうに歳をとっていききたい？」わたしは妙な質問をあなたになげる。

「食事をして酒を飲んで暮らす。あとは時々、映画や音楽に触れることができればいいかな」あなたはためらいもなくそう応える。

「きまっているのね」

「きまっているというか、そういう暮らし方しかできないな」

ベンチから立って、また《ばら園》のなかを歩く。まだ若い女の人がベビーカーをおしながら歩いていて、すれちがう瞬間、そつと会釈をする。自分の母親もこうしてよく知らない人に会釈をする性格だったといったのはわたしだったかあなただったか思いだすことができない。わたしたちの視線はばらをみながら、ばらから遠ざかって遠くをみるような眼になっていった。わたしたちは陽のひかりを受けながら何周も歩いた。パスピエは花をみることにもう飽きてしまったのか枯れ枝で土をいじりはじめた。あなたはわたしにパスピエがみえているのか不思議に思った。

「死ぬことも生きること、ふだんは忘れてしまいがちだけど、あるふとしたときにどちらにすがってしまふことがあると思う」

「あるだろうね」

「ふとしたきっかけでどちらかを意識したとしても、それまで通り生きることと死ぬことも忘れてふだん通り時間を過ごせたらいいな。どちらにもすがりたくないよ」

「肝がすわっていないとかなかなかそうはならないぜ」みちびかれるようにあなたは出口へと歩いて行った。わたしも黙って出口に向かう。そして二人は緑門をくぐる。

「どーんと待ちかまえて、生きることと死ぬことも、どちらがやってこようとわたしの時間の一部としてとらえたい。生きるとか死ぬとか……、その二つのこと以上に大切なことがこの世にあるんじゃない、って気がするわ」

「たとえば？」

「たとえばつてのはすぐにはみつからないな」

《ばら園》にはわずかな時間しかいなかった。ここに来た意味があったのかどうか分からないが、ここでしか話せないことがわたしにあったのかもしれないとあなたは直感した。

「また眠るね。こんどはいつ来るの」

「十二月に入ってからになるな」

「分かった。からだに気をつけて。また旅の話をしてあげるわ」

わたしが話したことは夢なかのできごとかもしれないなかつた。

これが夢ならきよの披露宴に足を運ばなくて済むのにとあなたは考えていた。

もうあまり連絡を交わすこともない友人の披露宴に呼ばれたとき、自分がそこに行つて何になるのだろうかと考えてしまつた。わたしが退院したばかりのこともある、あなたは家にいておきたかつた。けれどなにかのはずみで出席と向こうに通知してしまつた。わたしはクルハシと棲むようになってから植木鉢でアロエを育てはじめた。あまり枯れたりする心配のないつよい植物を眺めたくなつたからアロエを選らんだ。虫にさされたわけでもないのにアロエの葉から汁をだして肌にくつてみることもあつた。あなたが朝、そうして憂鬱そうに考えているときもわたしはアロエの観察をしていた。あなたはあわただしく出ていつて、わたし一人が部屋に残されてしまふ。あなたは披露宴が執り行われるホテルに到着しても、その日の朝のことを考えていた。わたしがなぜアロエを育て始めたのか、について考えているのかもしれない。あなたは薄霧がかかつたようなぼんやりとした意識のなかで朝の時間と披露宴で行われる催事を往復していた。

クルハシくんこれおみやげに持つて帰つて、とうとうつに何の文脈もないまま、かつての同級生からばらの花束をもらつた。冬なのにばらは艶やかに咲いていた。これが何か佳いことの前兆になればと期待をめぐらしてみたりもしたけれど、花に背負わせるのは酷な気がしてその匂いをふんと嗅ぐにとどめておいた。アサシマは何をしているだろうとぼんやりと考えた。そしてE線の電車にゆられながらあなたはこのばらの行く末について考えていた。